

会議名	第3回飼料イネ研究連絡会－肥育牛への飼料イネ給与上の課題と 発展方向 について－
開催日時	平成17年8月1日(月) 13:00 - 2日(火) 12:00
開催場所	(独)農研機構 畜産草地研究所(那須 GGホール)
主催者	(独)農研機構 畜産草地研究所
参加人数	約100人(民間・公立機関及び独法の研究者)
1. 会議の概要(500 - 1000字程度または議事内容の資料添付)	<p>飼料イネの普及定着のために種々の研究が進められているが、それら研究プロジェクト間の連絡、調整、協力が不可欠で、飼料イネ研究連絡会は研究成果の普及、研究ニーズの把握、関連研究の効率的推進を図る目的で設置されている。特に平成13年に「稲発酵粗飼料の生産・給与マニュアル」が纏められたが、それから既に4年が経過し、現場では種々の取り組みが進められ、新たな研究成果も得られているので、今回は肉用牛に焦点を絞って新しい給与マニュアルと研究方向を検討するために研究会が開催された。</p> <p>基調講演として「稲発酵粗飼料を給与した牛肉の品質と評価法」(畜草研 三津本 充)と題して、ビタミンE給与によって牛肉品質の保持されること、食肉の品質保持の評価法、稲発酵粗飼料給与が冷蔵保存中の牛肉品質保持に有効であることが具体的データによって示された。</p> <p>続いて一日目は、事例報告として1「ブランド牛肉・もちもち牛・の生産と販売」(岩手県紫波町紫波牛研究会会長 畠山正宏) 2「畜草1号添加飼料イネによる交雑種肥育の経営戦略」(埼玉県行田市関東肉牛肥育社長 斉藤三郎) 3「飼料イネ給与ホル雄肥育・こだわり鳥取牛・のブランド化(鳥取県畜産農業協同組合美敷牧場長 井本節生)のそれぞれ特徴あるブランド化をめざした取り組みが報告された。</p> <p>二日目は研究成果の報告として、1「稲発酵粗飼料の肉用牛への利用」長野県畜試 井出忠彦 2「稲発酵粗飼料の全肥育期間給与が増体と肉質に及ぼす影響」東北セ 押部明德 3粗飼料・飼料イネ・多給による牛肉の高付加価値化への期待」九沖セ 常石英作 4「肉用牛への飼料イネ給与事例を踏まえた給与法の改善と研究の方向」畜草研 中西直人 の報告があった。</p> <p>これらの研究を通して概説すれば、稲発酵粗飼料は嗜好性がよく、</p>

	<p>よく採食されること、消化性の特徴が解明されてきていること、肉質に関わるビタミンA（β-カロチン）についての知見が蓄積されてきていること、肉質保持に関わるビタミンE（α-トコフェロール）の効果、特に稲発酵粗飼料のこの点での有効性が明らかになってきていること、これらの知見を総合して肉牛、繁殖牛及び肥育の各ステージでの飼養法が更に解明されてきていることなどである。</p>
<p>2．今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名（分野と課題提供名ごとにその概要を200400字程度</p>	<p>「稲発酵粗飼料を給与した牛肉の品質と評価法」（畜草研 三津本 充）牛肉の品質保持についてのこれまでの研究成果を概説し、また、いくつかの品質評価法を整理し、稲発酵粗飼料を給与した牛肉がよく品質保持されることを示した。すなわち、肥育牛へのビタミンE給与が、牛肉品質の保持（退色と脂質の酸化の抑制）に有効であり、その濃度は3.5mg/kg肉である。また、稲発酵粗飼料の給与によりドリップの減少、冷蔵保蔵中の退色と脂質酸化を抑制した。この結果は、稲発酵粗飼料中のビタミンE濃度が高いことによると考えた。これらの成果は、稲発酵粗飼料の一つの有利性を示すデータであり、一方従来の肥育法と比べ肉質に関わるビタミンA含量が高いという問題もあり、これらを踏まえて、稲発酵粗飼料による肉用牛繁殖及び育成各段階での給与法について再整理する必要がある。事実、その方向で二日目の研究成果の発表が進められているので、それを更に推し進める必要がある。なお、この講演は、二日目の四つの各論ともいえる講演を総括して話されたものでもあるので、二日目の講演の概要は資料に譲る。</p>
<p>3．その他の発表で関心のあったもの（課題ごとに概要を400字程度）</p>	<p>粗飼料（飼料イネ）多給による牛肉の高付加価値化への期待（九沖セ 常石 英作）肉用牛飼料としての飼料イネは、発酵飼料で嗜好性が高いが、収穫時期、予乾の有無との関係でβ-カロチン含量が変動する多様性のある飼料である。いま、地域のブランド品として売り出すとき、どういうフレーズを打ち出すか。慣行の肥育用粗飼料のイナワラに変えて飼料イネを用いた場合、牛肉の特徴的な変化はビタミンAやE以外の特徴的な変化以外を期待することは困難である。そこで阿蘇産の美味しいお米のイメージと連携して「阿蘇産の飼料イネで育てたあか牛」というかたちで消費者紹介することになろう。産山村で20年続いている「さわやかビーフ」の経験を踏まえて、生産者、消費者の地道な、日常的な連携が重要ではないだろうか。</p>
<p>4．今後研究開発課題採択に当たって参考にすべき事</p>	<p>飼料イネの拡大は今後一層重要になってくると思われるが、一つには飼料イネの特徴を更に明らかにし、それを踏まえた飼養給与技術を木目細かく作って行くことが必要であろう。一方栽培につい</p>

項等	ても、育種を含め、雑草対策、倒伏対策など栽培技術、イネ発酵飼料の調製技術など技術の安定化が必要である。ビタミンEの問題は、流通の場面ではメリットになるが、消費者に対してはそれだけでは弱い感じがする。飼料イネで育てた牛肉、この特徴は、自前の、日本の風土に合ったというような抽象的な概念でしかアピールできないているが、そここのところを何か突破したいし、そのような研究を求めたい。
5 . 報告者	太田 顯

